

関係各位



## 平成 21 年度新入社員（3,172 人）の 「働くことの意識」調査結果

財団法人 日本生産性本部／社団法人 日本経済青年協議会

財団法人 日本生産性本部（理事長 谷口恒明）と社団法人 日本経済青年協議会（代表幹事 山口修司郎）は、平成 21 年度新入社員を対象に実施した「働くことの意識」調査結果をとりまとめた。この新入社員の意識調査は、昭和 44 年度に実施して以来 41 回目を数え、この種の調査ではわが国で最も歴史のあるものである。

### 平成 21 年度新入社員「働くことの意識」調査の主要結果のポイント

●**仕事への考え方**では、昨秋以降の経済環境の悪化を背景に、「リストラ不安」（39.8%→46.1%）と「会社の倒産・破綻の不安」（22.1%→27.7%）が前年より増加した。（6～7 頁参照）

●**就職先の企業を選ぶ基準**では、最も多かった回答は「自分の能力、個性を活かせるから」で、全体の 30.2%であった。以下「仕事がおもしろいから」（20.7%）、「技術が覚えられるから」（10.5%）など、個人の能力、技能ないし興味に関連する項目が上位を占めた。反面、勤務先の企業に関連する項目は低い水準にとどまった。調査開始当初（昭和 46 年～48 年）1 位だった「会社の将来性」は 10.2%であった。（5～6 頁参照）

●**仕事中心か生活中心か**では、「仕事と生活の両立」という回答が大多数（80.8%）を占め、「仕事中心」（8.7%）、「生活中心」（10.5%）、という回答を大きく上回った。（3 頁参照）

●**「デートか残業か」**では「残業」（82.8%）が「デート」（16.6%）を大きく上回り**過去最高の開き**となった。男女別に見ると「残業派」が男性 78.6%、女性 88.4%と、女性のほうが仕事を優先する傾向が強い。（7 頁参照）

●**「内定取り消しを受けたか」**を聞くと、全体の 2.7%が「はい」と回答し、95.7%が「いいえ」と回答した。（9 頁参照）

●**将来の共働き志向**は女性のほうがかなり強く、男性 38.9%に対して女性は 63.1%と**過去最高**であった。（平成 3 年以降の追加設問、9 頁参照）

●今年度新たに加えた**「積極的に「婚活」をしないと結婚できないか」**の質問については、全体の 31.1%が「はい」と回答し、男女別に見ると、男性 35.2%、女性 25.6%と男性の方が 10 ポイント近く上回った。（9 頁参照）

#### 【本件に関するお問い合わせ先】

財団法人 日本生産性本部〔社会労働部：高野 tel.03-3467-7252 fax.03-3467-7254〕

社団法人 日本経済青年協議会〔担当：片寄、畔津 tel.03-3469-2381 fax.03-3481-5726〕

※ 本調査の報告書は、「生産性労働情報センター」（tel.03-3409-2508）より発刊。

# 平成 21 年度新入社員「働くことの意識」調査結果の概要

## I. 本調査の沿革

本調査は昭和 44 年（1969 年）以来、毎年一回、春の新入社員の入社時期に継続的に実施されてきた。新入社員を対象とするものとしてはもちろん、就労意識をテーマとする調査として他に例を見ない長期にわたる継続的な調査である。これまで約 40 年にわたり、ほぼ同一の質問項目で実施されており、非常に興味深いデータの経年変化が蓄積されてきた。しかし、昨今の、終身雇用制の後退、若い世代の価値観の変化などを背景に、時代にそぐわない質問項目が散見されるようになってきた。そこで平成 13 年（2001 年）の実施にあたって、いくつかの質問項目を入れ替えた。もちろん、これまでの時系列データの資産的な価値を重視し、多少、最近の新入社員には無理があると思える質問も、極力残す方向でリニューアルをした。今年度はリニューアル後 9 回目の調査となる。

## II. 調査の概要

- (1) 調査期間 : 平成 21 年 3 月 4 日から同年 4 月 30 日
- (2) 調査対象 : 平成 21 年度新社会人研修村（オリンピック記念青少年総合センター）に参加した企業の新入社員
- (3) 調査方法 : 同研修村入所の際に各企業担当者を通じて調査票を配布し、その場で調査対象者に回答してもらった。
- (4) 有効回収数 : 3,172 件
- (5) 回答者プロフィール :

回答者プロフィール表

性別	最終学歴	業種	会社規模				
男性	56.8	普通高等学校	11.9	建設	3.4	99人以下	0.2
女性	42.9	職業高等学校	3.3	製造	22.6	100～499人	7.1
不明	0.3	工業専門学校	2.7	卸小売	30.1	500～999人	12.8
		短期大学	4.3	金融保険	1.9	1000～1999人	16.6
		4年制大学	58.4	不動産	2.0	2000～2999人	5.1
年齢		大学院	10.0	運輸通信	0.3	3000～3999人	14.2
16歳以下	0.1	専修・専門学校	8.3	電気ガス水道熱供給	0.0	4000～4999人	3.1
17歳	0.6	各種学校	0.3	外食産業	6.9	5000人以上	40.9
18歳	13.8	その他	0.7	情報関連サービス	11.7	不明	0.0
19歳	1.1	不明	0.1	その他サービス	20.1		
20歳	10.3			その他	1.0		
21歳	2.7			不明	0.0		
22歳	42.5						
23歳	12.3						
24歳	9.4						
25歳以上	7.0						
不明	0.1						

\* 回答数値は小数点第 2 位を四捨五入している

### Ⅲ. 本年度新入社員の特徴

#### 1. 新入社員の全体像

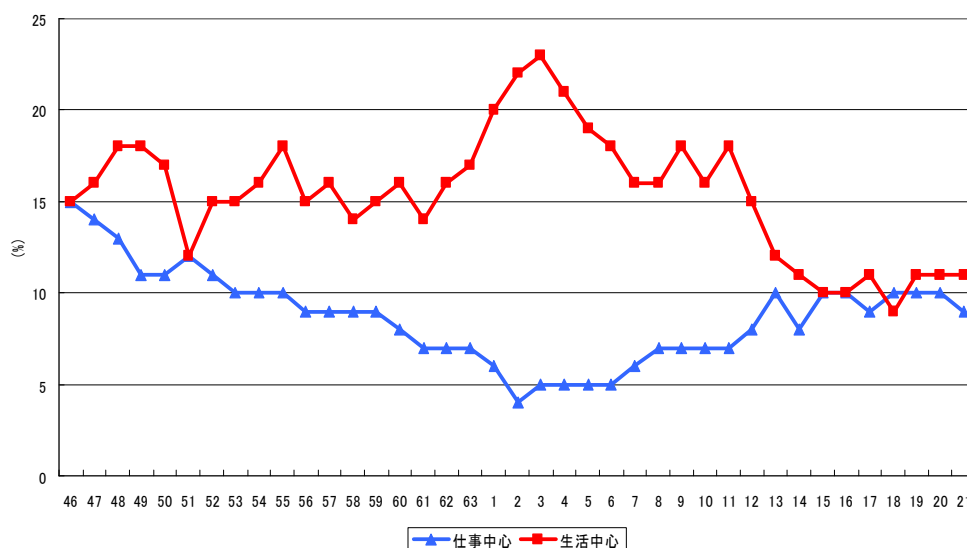
##### ——「第一志望に入社」が6割、「内定取り消し経験」2.7%

一昨年、昨年と大量採用が続き、マスメディアでは「超売り手市場」「バブル期を超える空前の採用数」といった言葉も使われた。昨年の平成20年入社組は、本格的にポスト氷河期に入ったと見られた。本年入社の新入社員も、この流れを受けて就職活動は順調だった。本調査において「第一志望の会社に就職できた」(Q33-1)が62.3%あった。しかし、昨年秋の世界金融危機を背景とする“未曾有の不況”によって、内定取り消しがあったことが伝えられると、雰囲気が一気に暗転した。

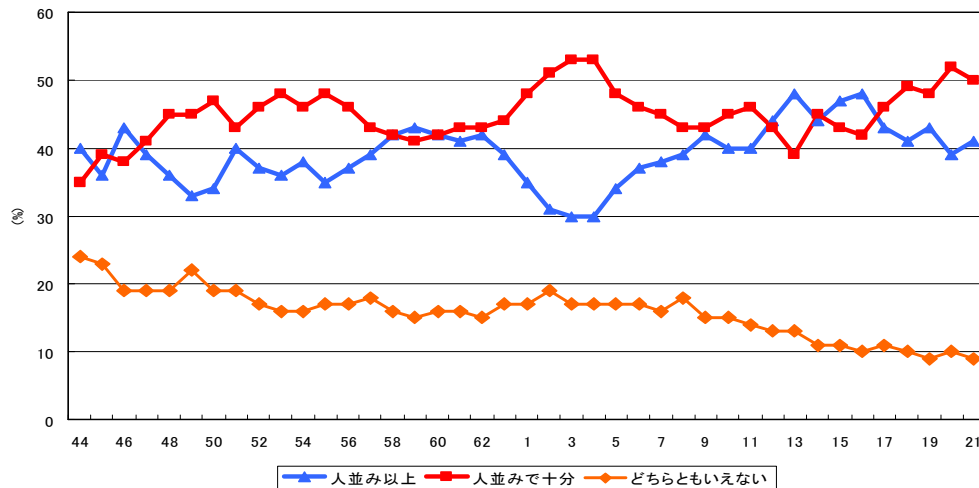
厚生労働省の4月30日の発表資料 (<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2009/04/h0430-2.html>)によれば新規学卒者の内定取り消しは427事業所2083人であったという(なお、本調査においては全体の2.7%が内定取り消しを経験)。このことは新入社員の意識にも影響を与えている。楽勝ムードで内定は得たものの、入社の日まで内定取り消しの通知が来ないか不安だったことがうかがえる。「いずれリストラされるのではないかと不安だ」(Q11-4)は前年の39.8%から46.1%に、「いずれ会社が倒産・破綻するのではないかと不安だ」(Q11-5)は前年の22.1%から27.7%にそれぞれ増加している。また「人並み以上に働きたいか」(Q8)では「人並み以上」が平成19年42.8%、20年38.5%、21年41.0%に変化し、「人並みで十分」が19年47.9%、20年51.9%、本年50.3%に変化している。ここ2年ほど見られたバブル期のような「お気楽志向」がやや退潮したように見える。

超売り手市場から内定取り消しへと暗転した本年の就職戦線だったが、社会の先行きについてはむしろ明るいイメージをもつものが増加している。「世の中は、いろいろな面で今よりもよくなっていくだろう」(Q30-18)が一昨年の48.5%から昨年42.9%に減少し、本年47.6%に増加している。「世の中は、いろいろな面で、今よりも昔のほうがよかった」(Q30-19)は、昨年の48.1%から今年は47.5%に減少している。サブプライムローン問題、原油価格の高騰、インフレ懸念といった現象を受けて、昨年秋あたりから経済の先行き懸念が浮上した。本年はさらに暗い材料が増えたが、見通しはわずかに好転している。

#### Q6 仕事中心／生活中心(経年変化)

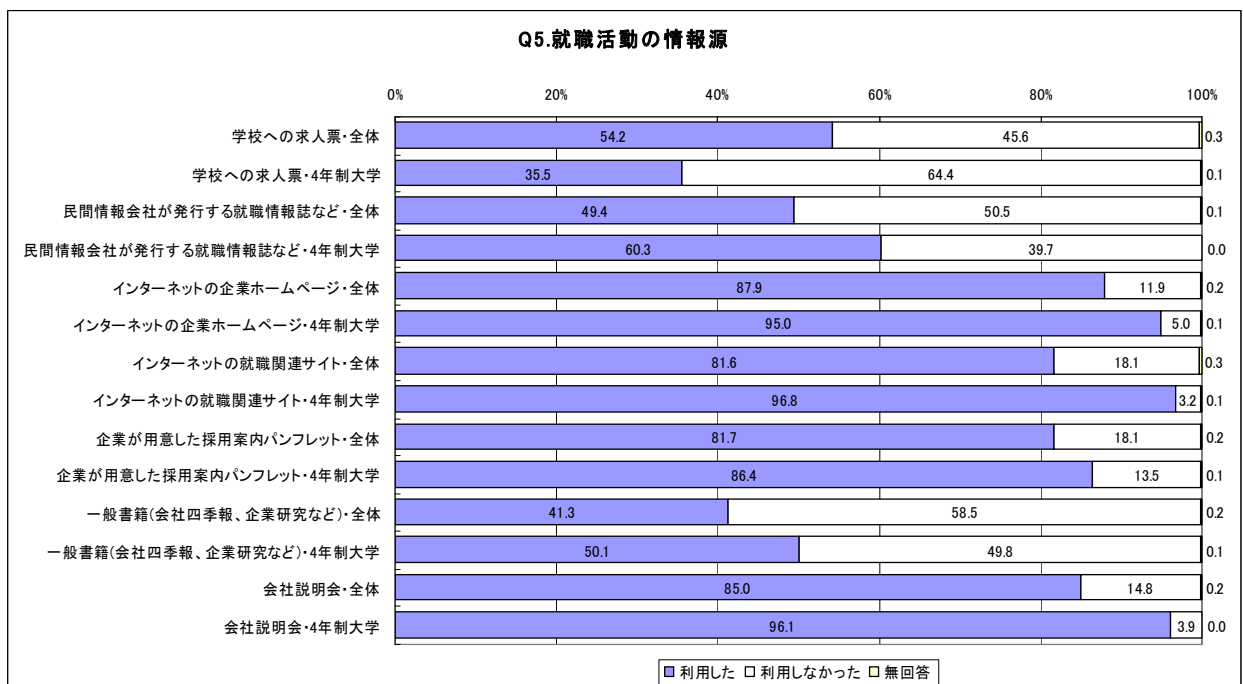


### Q8 人並み／人並み以上(経年変化)



## 2. 就職活動の情報源——「企業ホームページ」が全体で1位に

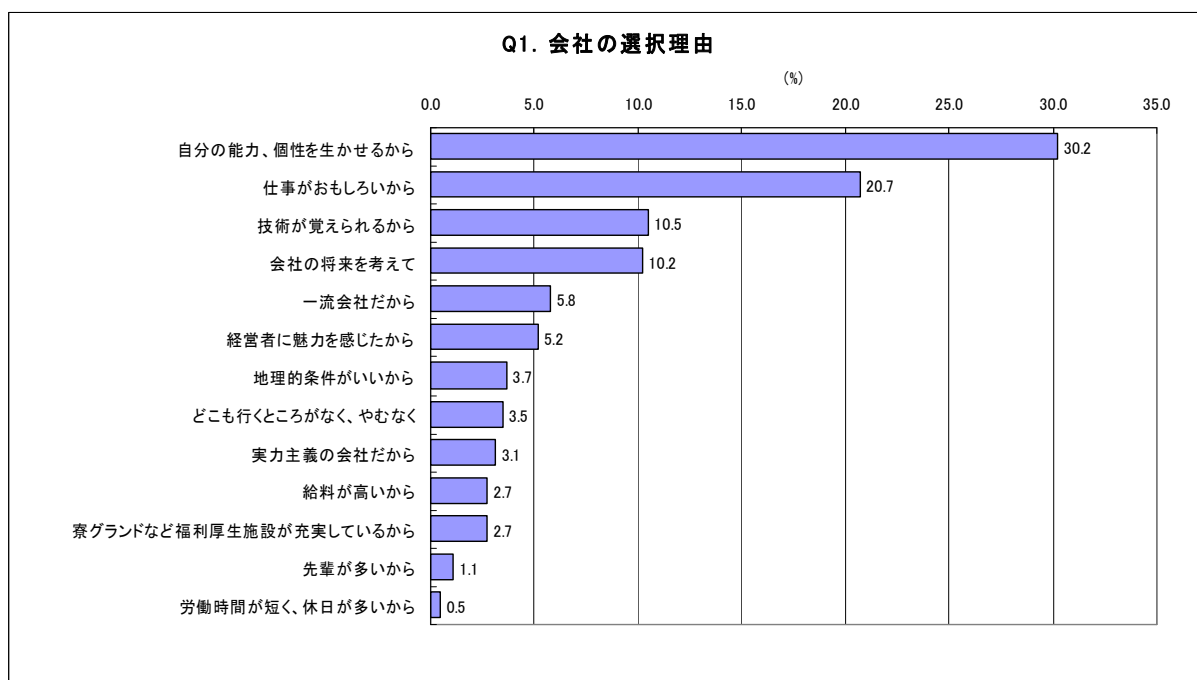
就職先を選択するにあたって利用した情報源(Q5)は、利用度の高い順に「インターネットの企業ホームページ」(87.9%)、「会社説明会」(85.0%)、「企業が用意した採用案内パンフレット」(81.7%)、「インターネットの就職関連サイト」(81.6%)、「学校への求人票」(54.2%)、「民間情報会社が発行する就職情報誌など」(49.4%)、「一般書籍(会社四季報、企業研究など)」(41.3%)となる。会社説明会、パンフレットなどが今も上位にランクされるが、昨年にひきつづき「インターネットの企業ホームページ」が全体で1位となった。企業ホームページ、就職関連サイトについては、四年制大学卒、大学院卒とも95%以上が利用しており、四年制大学卒、大学院卒の就職にあたってはインターネット情報の重要性が非常に高くなっている。



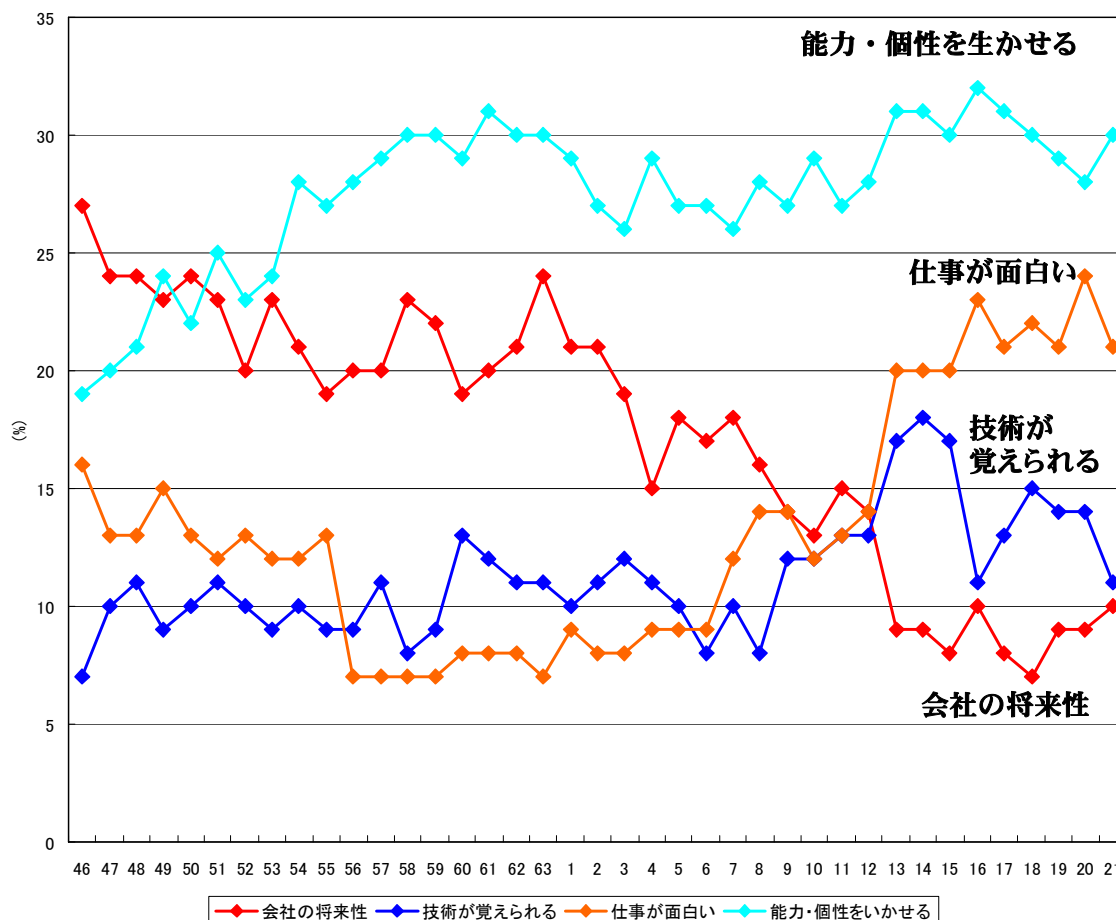
### 3. 会社の選択基準——「就社」から「就職」へ 能力・個性を重視した会社選び

「会社を選ぶとき、あなたはどのような要因をもっとも重視しましたか」(Q1)という質問に対して、最も多かった回答は「自分の能力、個性を活かせるから」で、全体の30.2%であった。以下「仕事がおもしろいから」(20.7%)、「技術が覚えられるから」(10.5%)が上位を占めた。このような個人の能力、技能ないし興味に関連する項目に比べて、勤務先の企業に関連する項目、「一流会社だから」(5.8%)、「経営者に魅力を感じて」(5.2%)、「福利厚生施設が充実しているから」(2.7%)などは10%に満たない数値であった。終身雇用制の後退を背景とする、昨今の「就社」より「就職」という傾向を反映しているものと思われる。

会社選択の要因(Q1)で興味深いのは、昭和46年度には27%でトップに挙げられていた「会社の将来性」が、一ケタ台(昨年8.7%)にまで落ち込んでいたが、今年わずかに増加して二ケタ台を回復したことである(ここ7年間の推移は8%→10%→8%→7%→9%→9%→10%)。「自分の個性・能力を活かせる」「仕事がおもしろい」「技術が覚えられる」といった項目が上位を占めてはいるが、不況を反映して経営の安定性も重視されたようだ。



Q1会社の選択理由(経年変化)



#### 4. 就労意識——“感謝される仕事がしたい”が2位

就労意識について13の質問文をあげ、「そう思う」から「そう思わない」まで4段階で聞いてみた(Q11)ところ、肯定的な回答(「そう思う」と「ややそう思う」の合計)の比率は以下のような順になった。

##### 就労意識のランキング(Q. 11)

- 1位 仕事を通じて人間関係を広げていきたい(95.4%)
- 2位 社会や人から感謝される仕事がしたい(94.1%)
- 3位 どこでも通用する専門技能を身につけたい(92.8%)
- 4位 これからの時代は終身雇用ではないので、会社に甘える生活はできない(84.4%)
- 5位 高い役職につくために、少々の苦勞はしても頑張る(80.8%)
- 6位 仕事を生きがいとしたい(75.7%)
- 7位 仕事をしていくうえで人間関係に不安を感じる(66.0%)
- 8位 面白い仕事であれば、収入が少なくても構わない(56.9%)

- 9位 いずれリストラされるのではないかと不安だ（前年 39.8→本年 46.1%）
- 10位 職場の上司、同僚が残業していても、自分の仕事が終わったら帰る（33.2%）
- 11位 仕事はお金を稼ぐための手段であって、面白いものではない（32.1%）
- 12位 いずれ会社が倒産したり破綻したりするのではないかと不安だ（前年 22.1→本年 27.7%）
- 13位 職場の同僚、上司、部下などとは勤務時間以外はつきあいたくない（21.9%）

総じてポジティブな項目が上位を占める傾向があり、反対に、ネガティブな項目が下位を占める。職場の人間関係にドライな若い世代が多いというイメージがあるが、この結果を見る限り、新入社員たちは職場の人間関係に大きな期待をもっている。反面、「仕事をしていくうえで人間関係に不安を感じる」も 66.0%あり、職場の人間関係が新入社員の大きな関心事であることがわかる。

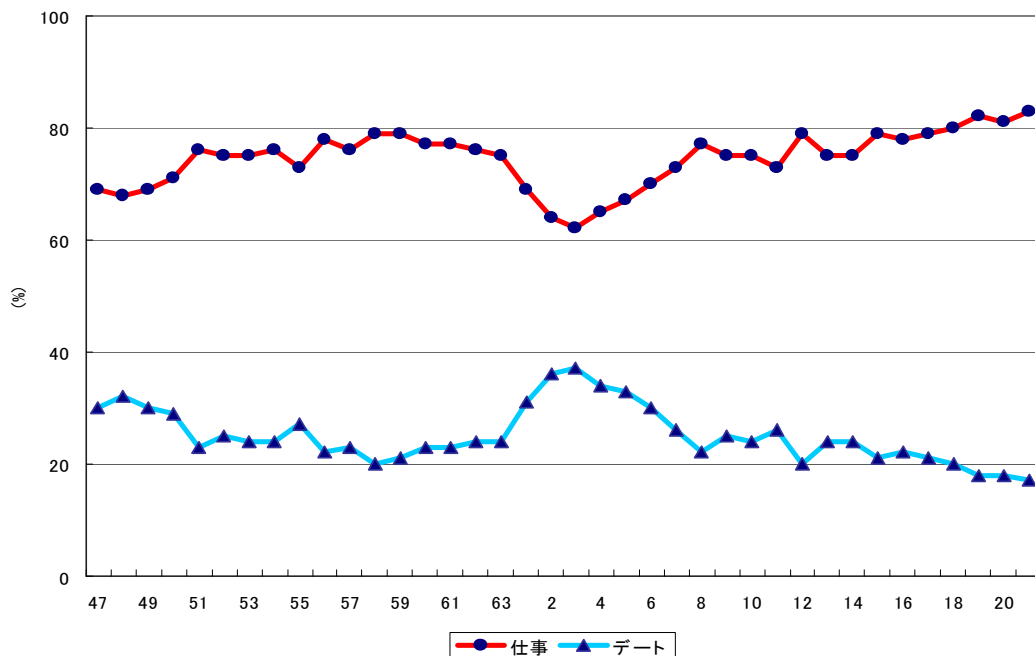
また、ここでも専門技能への関心が見られ、これからの職業生活において、個人の専門技能をよりどころとしていきたいとする意向が伺える。

昨年との比較では、「いずれリストラされるのではないかと不安だ」が前年の 39.8%から 46.1%へ、「いずれ会社が倒産したり破綻したりするのではないかと不安だ」が前年の 22.1%から 27.7%へ増加した。不況期にあって勤務先の経営の安定性に関心がもたれている。

## 5. デートか残業か——プライベートより仕事を優先が多数派

「デートの約束があった時、残業を命じられたら、あなたはどうしますか」（Q15）という質問に対しては、「デートをやめて仕事をする」（82.8%）、「ことわってデートをする」（16.6%）と、プライベートな生活よりも仕事を優先する意向が伺える。男女別に見ると、「デートをやめて仕事をする」という回答は男性 78.6%に対して、女性 88.4%と女性のほうが 10%近く上回っている。

**Q15 デートか残業か（経年変化）**



## 6. 生活価値観——“いい時代に生まれた”が減少

一般的な生活価値観について16の質問をした(Q30)。4段階のうち「そう思う」「ややそう思う」の合計%で順位づけると、おおむね、積極性を示す項目が上位を占め、消極性を示す項目が下位を占めた。1位となったのは「(14) 人間関係では、先輩と後輩など上下のけじめをつけるのは大切なことだ」(88.8%)で、以下、2位が「明るい気持ちで積極的に行動すれば、たいていのことは達成できる」(85.7%)、3位が「(22) 将来の幸福のために、今は我慢が必要だ」(84.6%)であった。

「人間関係では上下関係のけじめが大切」が1位となったが、別項目(Q11)にも「仕事を通じて人間関係を広げていきたい」(95.4%)、「仕事をしていくうえで人間関係に不安を感じる」(66.0%)といった結果があり、新入社員にとって職場の人間関係が微妙な問題として意識されていることがうかがえる。

「自分はいいい時代に生まれたと思う」は採用状況の好転を背景に、平成18年に17年の74.0%から80.0%に増加し、19年も81.2%で20年は81.5%だったが、本年は77.7%に減少した。景気の悪化や内定取消が影響したものと思われる。

### 重視する生活価値観 (Q. 30)

- 1位 人間関係では、先輩と後輩など上下のけじめをつけるのは大切なことだ (88.8%)
- 2位 明るい気持ちで積極的に行動すれば、たいていのことは達成できる (85.7%)
- 3位 将来の幸福のために、今は我慢が必要だ (84.6%)
- 4位 他人にどう思われようとも、自分らしく生きたい (82.3%)
- 5位 自分はいいい時代に生まれたと思う (77.7%)
- 6位 すこし無理だと思われるくらいの目標をたてた方ががんばれる (76.4%)
- 7位 あまり収入がよくななくても、やり甲斐のある仕事がしたい (65.7%)
- 8位 企業は経済的な利益よりも、環境保全を優先するべきだ (62.5%)
- 9位 たとえ経済的には恵まれなくても、気ままに楽しく暮らすほうがいい (59.0%)
- 10位 冒険をして大きな失敗をするよりも、堅実な生き方をするほうがいい (58.2%)
- 11位 世の中、なにはともあれ目立ったほうが得だ (52.0%)
- 12位 リーダーになって苦勞するよりは、人にしがっている方が気楽でいい (49.4%)
- 13位 自分と意見のあわない人とは、あまりつきあいたくない (47.7%)
- 14位 世の中は、いろいろな面で今よりもよくなっていくだろう (47.6%)
- 15位 世の中は、いろいろな面で、今よりも昔のほうがよかった (47.5%)
- 16位 周囲の人と違うことはあまりしたくない (37.4%)



## 7. 「婚活」の必要性～男性の方がより強く

継続調査の項目に加え、平成3年（1991年）から、将来結婚した場合、「共働きをするつもりか」どうかという項目を設けているが、「する」との回答が全体で48.9%あった。特に、女性では63.1%が「する」と回答をし、「する」との回答は過去最高であった。また、「する」との回答の男女でのポイント差は24.2%（男性（38.9%）、女性63.1%）で過去最高の開きとなった。

また、平成16年（2004年）から、その年に関心を集めた話題などについて、一年限りの質問項目を設定している。今回は、バブル期を超える採用数があったと言われたことから「第一志望の会社に入れたか」と、話題となった「内定取り消しを受けたか」、さらに、最近の流行語から「積極的に「婚活」をしないと結婚できないと思うか」を聞いた。

まず「第一志望の会社に入れたか」（Q33-1）かどうかを尋ねると、「はい」と回答したのは全体の62.3%に達した。男女別では男性61.5%、女性63.4%とやや女性優位であった。

「内定取り消しを受けたか」（Q33-2）を聞くと、全体の2.7%が「はい」と回答し、95.7%が「いいえ」と回答した。この調査対象に関する限り、内定取り消しはごく少数の体験にとどまる。学歴別では、「各種学校」（9.1%）が他の学歴に比べやや多く、業種別では「不動産」（7.8%）が他の業種に比べやや多かった。

また、「積極的に「婚活」をしないと結婚できないと思うか」を聞いたところ、全体の31.1%が「はい」と回答している。これを男女別に見ると、男性35.2%、女性25.6%と男性のほうが「婚活」の必要性を強く感じている。「デートと残業」の項目においても、男性のほうが女性より10ポイント近くデートを重視する結果となっており、恋愛や結婚について女性のほうがドライな感覚をもっていることがうかがえる。

### 参考. 本調査に関連する出版物について

本調査を素材として二つの出版物が上梓されている。あわせて参照いただければ幸甚である。

日本生産性本部「職業のあり方研究会」「履歴書の会」編『新社会人白書2009』労働調査会  
岩間夏樹著 『新卒ゼロ社会——増殖する「擬態社員」』角川書店（角川 one テーマ21）